

トッテナム・ヘイル（翻訳）

島宗 雄太

（桑村ゼミ）

エイミーは6台のタクシーを観察していたが、運転手たちはわざと彼女を避けていく。この時彼女はあらぬことにならないように地下鉄に乗って家に帰った方が無難であるという考えにとりつかれていることに気づいていた。もっとも、すでに彼女の予定は遅れていて怒りを覚えていたのでゆっくりと自分の人生を進めることに対して何のためらいもなかった。何故ならば、路上でタクシーが混んでいる時間帯に、相手にされずに立ち続けていたら彼女自身の中にかろうじて残る正気さも失いかねないという危惧があったうえ、今晚自分がしなければならぬであろうことを心に留めておく必要があったからだ。

今夜エドと姉と彼女の夫が午餐に来ることになっていた。今日はエイミーにとって理想のアメリカの家族像を持った、誰もしが敬う人たち、エドがエイミーと結婚をする為に手紙を書き、許しを乞うてきた人たちと対面する初めての時であった。エドと彼の家族の関係は当初彼女にとって少しばかりおかしく楽しいものであったので、彼女は自身の歯の健康状態の診断書やGCE（中等教育修了書）のコピーも手紙と一緒に彼の家族が住むニューヨークへ送った方がいいんじゃないかとエドに言ったほどだ。しかしその後三年間エドが毎月姉のベラに手紙を書き続ける姿を見て、エイミーは奇妙に感じるようになった。一度も手紙の内容を見ることができなかつたため彼女は悔し紛れに手紙の一通を投函前に開封した。手紙にはエイミーとエドの間に先月から今月までの間に何がおこったのかがかいてあり、二人の自宅のキッチンに敷く為に購入した絨毯のことや、エドの給料が見直され昇給するだろうといった彼の仕事に対する抱負、エイミーが買った新しいドレスに対する称賛、二人で仲良くしている夫婦と行ったピクニックについて等しい年をしてどうでもいいようなことが細々と書いてあった。手紙を読んだエイ

ミーはエドの頭がおかしくなったのではないかと考え不安になった。なぜならエドの手紙はアメリカ国内の街に暮らす姉が必要とし、欲しがるとはならず、言わば母親が夏のキャンプへと向かわせた愛しい息子から待ち望むような内容であったからだ。

彼の家族の訪問は三ヵ月以上にも及ぶ前から計画され、エドは幸福感に満ち溢れていた。ベラと彼女の夫ブレアはヨーロッパ旅行の一環で三日間はロンドンに滞在する予定だ。彼らは早朝に到着し、快適なベッドとシャワーのあるすてきなホテルに引きこもって他人とは会わずに時差ボケから回復するのを望むであろう。そしてすっかりリフレッシュした後の19時頃、彼らは愛するエドに会う為に、エイミーを新しい家族の一員として迎える為にやって来るだろう。翌日には家族四人でウィンザー城へ出掛ける。夜には劇を楽しみながら晚餐をして、土曜日の午前にはエイミーが彼女の新たなお姉さんとなる人物であろうベラを買い物に連れて行き、どのお店が良いかといったような会話をしたり女同士で昼食をしたりして大いにもてなすに違いない。その後ベラとブレアはパリへと向かって去っていくのだろう。

エイミーとエドの夜は決まって同じパターンである。エイミーは通常、木曜日は勤め先であるハーレー街から病院の受付嬢として働いた後帰宅する。靴を脱いでスリッパに履き替え、買ってきた物を整理して夕食の準備をし、暖炉に火を入れるとエドも帰宅する。エドはいつも仕事から帰って来ると疲れ切っている。暖炉の前でリラックスし始めて、体が暖まり始めると手にしていた書類を置く。そしてシェリー酒を飲み、さらに緊張がほぐれると、夜に残業をすることなどどうでもよくなっていく。彼は酒を片手にしてこう言う。私の会社は私を雇ったことに大いに感謝しているはずだ、私のような人物であれば余暇を大いに楽しんでよい

のだと。そしてエドは趣味で作っている机を幸せそうに彫り始めたり、テレビを見たり、クロスワードパズルでエイミーと一緒に遊んだりする。この時、エイミーはいつも嬉しく思い彼にとって自分という存在が不可欠であると再認識する。エイミーのような理解の仕方をしてあげなければ、エドは幸せな日々を送れずあれこれ心配ばかりしてしまうからであろうと思えるからであった。

この様な日常の後、恐ろしいベラの訪問の日がやってきた。計画を立ててから三ヶ月が経過した今、エドは気が気ではない。エイミーが彼をどんなに褒めても、この上なく愛し続けても、エドの状況は変わらなかった。中間管理職にも昇進できず発展も無かった為、職場での自分の立ち位置を含めた概要説明と、社内及び家庭内での努力が実を結ばなかったことをベラに知られ、弁解しなければならぬと彼は考えていた。毎夜、エドのブリーフケースは大量の書類で溢れていた。職場での勤務に集中出来ず急用に振り回され私生活に影響を与えていたのだった。

「おお…エイミー…カーテンレールのフックが三つ無くなっているよ…直せるかい？お願いだ」。

時折、彼はこう付け足す。「ベラが来る前に」。だがこれは稀で、言わない時もあった。エイミーは理解済みだったからである。

電話の送話口が汚れている、風呂のマットが古い、窓の外にある植木箱の塗装が必要である、肉切り用の食器の台足、底のふちが本来の方向とは逆にねじ曲がっている、冷蔵庫の中の製氷皿にヒビが入っている。

何度か、エイミーは次のようにエドに言った。私達の家が様子が良いのか、悪いのかを調べる為に来るのではない。カーテン、電話の送話口や製氷機の状態を確認する為に大西洋を横断する訳ではない。純粋に会いたいから訪れてくれるのである。しかし、彼の表情は深刻になる一方であり、正しさこそが全てであると口にした。

正しく見せることが重要であった。その結果、エイミーは精神的に参ってしまったのである。家は徹底的に整理整頓された。膨大な量の蒸し鍋を温め直し、極上のワインが選ばれ、テーブルはエイミーが朝、出掛ける前には整えられた。もしベラが家宅捜査に踏み入る警察の連中と共に現れた

としてもいかなる落ち度も明らかにされないといった徹底ぶりだった。

目の届かない所にあるゴミの山も、戸棚や押し入れに乱雑するエイミーの女性用の私物も無い。ベラが居間の絨毯をひっくり返して調べようとしても何も発見出来はしない。

北ロンドンでの生活を称賛する雑誌や新聞が戦略的に家の中に並べられたのはエドとエイミーが生活の拠点としている郊外のイメージアップをねらい、ベラの視線を逸らす為であった。ベラとブレアがエド・エイミー夫婦のご近所さんに挨拶をすれば彼らが飲み誘われるであろうということも思案した。

エイミーは午後の休みを取り、美容室へ行きたいとエドに言った。それは彼女自身が決めたのだがエドの優しさを感じたかったからだった。だが彼のあの不安げな表情が再び表れた。「…エイミー…君は今でも美しい…」彼は彼女に誤解の無いように言った。「ただ…姉さんに伝えているけど、君は身だしなみにはとても気を付けている…いつも僕達の写真を送っているだろ…？僕達がとても美しく思われる様な…」

ベラは醜い。エイミーはいつも怒りと共にそう思った。綺麗ではなく強い印象があり鮮烈さがあった。何年か前に撮られたと思いきベラの写真をエドに見せてもらったことがあったが、彼のお姉さんのファッションはシンプルかつきちんとしていてヘタな細工は感じられなかった。何故なのか、それから、エドはエイミーの衣装筆筒を眺めながら彼女が何を着るべきなのかを考えて数日間夜を過ごした。ベラの仕事は教師だったが、夫のブレアに関しては何をしているのか分からなかった。彼女と同じ学校で運営側として働いていないのではないかとエドは思った。ブレアはエドに自分の事を話さず、唯々ベラの良き夫として在っていた。彼はとても大人しく、献身的な人物であった。これらの事柄は次に繋がる。ベラの四人の若い兄弟達は彼女に全てを委ねていた。彼らは彼女が強制しない限り学校に行くことを拒んだであろう。だが、学校へ行った結果、彼らは素晴らしい社会人になることが出来た。そして良い奥さんに恵まれることも、彼女の影響力無しでは実現しなかったであろう。彼らにとってベラは指導者であ

り、彼女の存在が彼らに希望を持たせ、孤児にもさせなかったのだ。彼らの方から15歳であったベラを母親代わりになる様に仕向けたわけではない。エドが当時5歳の時、彼の父親と母親が飲酒運転で湖に車もろとも飛び込む事故を起こしたが、彼は全く覚えていないらしい。

時々、エイミーは他の義理姉妹達について考えることがある、つまりエドの兄弟の妻達のことだ。全ての兄弟が愛すべきベラから離れたのは奇妙ではないだろうか。カルフォルニアへ去った一人の兄弟がいた。ニューヨークへ去るのと同じくらいのことである。他の兄弟達はバンクーバーやメキシコ、そしてエドはロンドンである。エイミーは自分が他の義理姉妹達と上手くやっていると不安に思ったが、やがてそれは確信へと変わった。義理の姉妹達は、ベラが自分達の夫にしていた事に対する憎悪の絆で結ばれているはずである、と。

しかし、この事を暗に示す家族間の手紙は無く、手紙はベラについての事柄しか書かれていない。以前ベラが三週間程の間インフルエンザで倒れていた時、カルフォルニア州サンノゼ、バンクーバー、メキシコで投函された手紙がトッテナム・ヘイルの自宅のマットの上に届いた。手紙の内容は最新の会報であった。三人の兄弟がエドに伝えたかったのはベラのお見舞いをする為にイングランドに向かうことに関する祝福と激励であった。一方で、ベラの手紙は短く明瞭で、最近の事柄について、自分が承けて然るべき称賛や疑問等が述べられていた。エイミーは彼女について考えれば考える程、ベラの異常さを確信した。

そして今、美しく整えられた髪と上品に化粧がされた顔、綺麗に爪を手入れし、彼女の怒りを駆り立てたマッサージ施術が施された全身と共にエイミーは駅のプラットフォームで、あの怪物に会う為、自宅へ戻ろうと電車を待っている。彼女は2、3の視線を感じた。それらは彼女にとって悪いものではなかった。一人の少年がエイミーのお尻を強めにつまんで悪戯をしてきた。痛さを感じてイライラが増してきたが自分を美しくする為に多額の資金を美容に投入し自信を得ていた彼女は声高に、そして痛快な声で言った。「二度とそんな事をしないで」。周りの人々が少年を見ると、彼は顔を真っ

赤にして次の停車駅で降りた。二人の男がエイミーによくやったと言ったので、彼女は自分が成熟した大人へと変化していると感じて嬉しかった。

エイミーがジムで汗を流していたとき、あの忌まわしいベラが到着する前に家で二時間程の余裕が出来ると考えていた。その時間に夕食の最終仕上げをしてお風呂に入り、着替える。エドは午後から休みを取り、綺麗な花を買い最終的な微調整を行う予定であった。

「お昼から家事をする為に休みを取ったことを知ったら、お姉さんが不思議に思うのでは？」エイミーが尋ねた。

「もし姉さんが尋ねなかったなら、僕達の方からあえて理由を言う必要は無い」。エドはまるで小学生のような忍び笑いをしながら答えた。

エイミーは私は何も悪いことはしていないと自分に強く言い聞かせた。彼女はエドを誘拐したのではなく、愛して結婚したのであると。エドを献身的に、どんな試練に対峙しても屈せずに支え、彼が落ち込んだ時には無理はさせず同調することに努めた。しかし自分をこの様にさせたのはあの悍しいベラが原因ではないのだろうか？もしその可能性が少しでもあるのならば、この様に考えることは間違いではない。だが何故不安に感じるのでしょうか。すると、電車が突然揺れた。乗客同士が互いの腕の中に飛び込むと、皆が軽く笑い、謝り合って再び離れたが、彼らは電車が停車駅に到着した訳ではなく停止しているのに気が付いた。

「あーあ」。ブリーフケースを片手に、派手な身形をした男が言った。「今日は早く帰宅出来ると妻に言ったのに、一晩中ここで立ち往生だな」。

「そんな事にはならないわよね？」疲れからか、惨めそうな雰囲気の方が言った。女は大量の買い物袋を抱えていた。「私が帰らないと、子供達が家の中に入れれないわ」と不安げな声で付け足した。

エイミーは状況を見極めようとしていた。ここに居る間にベラがあとどれくらいすれば家に到着するのか考えた。もし列車が十五分遅れたのであれば、お風呂に入れられないかもしれない。それが三十分の遅れに変わったならば完全に機会を失い、夕食のデザート飾り付けに時間を費やすであろう。エイミーの心の中で三十分以上の遅延は考えられなかったのである。

その後すぐに一人の乗務員の男が通路に現れ、事故は発生しておらず危険は無いが、点検をする必要があるために遅延が発生するかもしれない、ロンドン鉄道より謝罪しますと説明した。

いや、彼は列車がどのくらい遅れるのかを知らされていないと思う。

私もそう思います。恐らく何も危険が無いことを伝えただけですね。

もしかすると他の列車が衝突してきたのかもしれない。

確かに。彼は非常に申し訳なさそうな様子でしたよね。

これ以上対処の方法が思い浮かばない様子でもある。

そうですね。私達がもし線路に飛び出したら感電死して死にますね。

「すぐにわかるさ」。派手な身なりの男が言った。彼はエイミーに感謝している様子で、「このまま置き去りにされても僕は構わない。何故ならばこんな優雅で上品な道連れと出会えたからね。突然だが、私はジェラルド・ブレントだ」。

「私はエイミー・ベイカーよ」。彼女は微笑みながら言った。

「ベイカー婦人、一緒にお酒を飲まないか？」ジェラルドが言った。彼は一瓶のワイン、コルク抜き付属品と小型ナイフ、魔法瓶の蓋をブリーフケースから取り出した。

笑顔と共にエイミーは了承した。

「僕は飲み口の反対側から飲むから」とジェラルドが言った。

ロンドン市民の間でよく知られている寛容さと従順さが列車の一室で如実に垣間見られ、他の乗客は、スタンダード誌やニュース誌を読み始めて落ち着きを取り戻していた。一人の男は狸寝入りをしている。表情が暗い女は女性誌を手に取り、自分が置かれている状況を諦めている様子である。

「あなたの義母は午餐に来るのか」とジェラルドが言った。

「酷く、口煩いババア、申し訳ない。僕は君の旦那のお母さんを全く好きになれそうにない。まあとにかく、このワインを飲めば忘れられるよ。おかわりはどう？」

エイミーは二杯目を注がれたが彼が本音で話を

しているのか、冗談を言っているのか少し心配であった。

「ジェラルド、あなたは私達が今夜の午餐を楽しみとは思っていない、そう思うの？」とエイミーが尋ねた。

「こうなる運命だったのだ」と彼が答えた。彼は列車にどのような問題が起こったのかを説明した。安全装置が適切に作動し、それを元に戻す為に鉄道会社の人間がトンネルの中へ職員を送らなければならないはずだと。

「最低でも三、四時間は掛かるだろう」と彼が言った。

単なる可能性では無かった。ロンドン市内全体でたった一つのこの地下鉄が機械の故障を起こすとは夢にも思わず、彼女は地下鉄に乗った。何千日と一緒に過ごしてきたエドとの日々の中で今回の問題を予測することなど出来なかった。これまでにないほど、家族に迫る大きな黒い影の様な存在ベラが脅威と失望の茸雲になろうとしている状況に、エイミーは理解不能状態に陥る寸前であった。エドはきっと立ち直れないに違いない。午餐が修羅場と化すのであろう。彼はエイミーを捜しに街を駆け巡るだろう。妻が自分の姉に対する一種の反感から家出してしまったと考えたのかもしれない。エイミーは自身が置かれている壮絶な状況に吐き気を催してきた。顔が蒼白し始め、失神する寸前であった。

「しっかりしろ」ジェラルドが言った。「ワインをそんな勢いで飲んではいけない。確かにこのワインは非常に良い。豊かな味わいでとても濃厚だ。さあ、ここに座って」。彼はエイミーを座席の隅へと移動させた。ロンドンの町で一つの助け合い、思いやりの精神が生まれようとしていた。知らない者同士の間柄ゆえに何年もの間互いに何も語らず街を行き来するはずの二人の間に、悲しみを分かち合うことによって友情が芽生え始めていた。

エイミーはベラのことを全てジェラルドに話した。彼女はエドとベラの手紙を開けて読んだこと、ベラが兄弟達を虐げる様に支配し感謝を強要していること等を口に出すにつれて、いかにエドの姉が恐怖に満ち溢れている人物であるのか、バンクーバー、サンノゼ、メキシコそして同様にロンドン、これらに偏在する四人の男性が自分達を育

てて貰ったといった感謝と尊敬の念を示す為、いかにか弱い海狸の様に働かされているのかを再認識した。一方で、実を言うとエイミーは突然あることに気が付いてもいた。ベラが行ってきた全ての事は母性本能からくる愛情の表現であり、彼女が得てきた物は責任と社会奉仕の精神への賛美と、そして四人の兄弟から受け取る奴隷の様な忠誠であったと。

エイミーとジェラルドは一本のワインを飲み干した。ジェラルドは幾度となく激励の言葉を吹き、エイミーが破たんしかけた午餐のことを思い出して取り乱す度に元氣付けた。

「くだらない。君の旦那や家族はニュースを見て理解してくれるはずだ」

「なあ…奥さん…彼は駅に電話をして君のことを確認してくれるはずだ」

「なあ…愛らしい奥さん…ベラは君がツルハシを手にしてここから脱出する為に列車を叩き切ってほしいなんてことを考えてはいないよ」

ジェラルドはエイミーに自分の妻とあった出来事を話した。以前彼は妻に酔いつぶれていると見せかけ、ある事をした。彼は自分の会社で働く秘書と浮気をしたのである。この事実は決して明らかにならなかったし、彼自身その様な事が起こらないと高を括っていた。しかしながら彼はどうしても不義の仲を幸せとは感じる事が出来ず、関係を断ち切った。その後、彼は情事があった相手方から偏執狂の糞野郎と彼の職場で三人の上司を目の前にして罵倒された。このことは彼にとって自分自身で招いた悲惨な過去であった。

コーヒーとサンドウィッチが隣の車両から持ち込まれ、一風変わったパーティが始まった。電車を降りる事になった二十二時頃まで合唱したり、カメラマンがフラッシュを焚いて写真を撮影したりする内にエイミーはベラや午餐のことを少しずつ忘れかけていた。

駅のホームにベラの姿が見えてエイミーは衝撃的だった。電車から降りて群衆の中からベラの表情を確認すると、その顔はエイミーの安否を心配して不安げであった。ベラの背後には同じ様に重い雰囲気醸し出すブレアとエドが居た。

「彼女がいるわ」。ベラがエイミーに向かって叫び駆け寄って来て、腕を差し伸べてきた。

「エイミー、私の愛おしい妹、大丈夫？怪我は無い？気分はどう？可哀想なエイミー、なんて辛い事なの、なんて悲しい事なの！」ベラはエイミーから離れてエドに抱擁させた。そしてブレアはエイミーの手をしっかりと握りしめた。

ジェラルドはエイミー達の様子を見ていた。その後、彼は訝しげな笑みを浮かべハット帽を頭から上げた。

彼ら四人は共に駅を後にした。ベラに険しさと平静さは見られず、むしろ懸念が感じられた。彼女は鉄道会社に四回電話を掛けて安全を確認し、非常事態に備え応急処置用の一式を持って来ていた。しかしながら今、幸運にも、万事無事に過ぎエドとエイミーの愛すべき自宅へと皆が向かっている。エイミーが帰宅し電話をしなければならなかったとき、可愛らしい植木箱を見つめながら家の中の様子確かめ、異常は無く、ただ新鮮さと整然さを感じると幸福そのものであった。家族全員が家に戻り、彼女が用意していた通り最高の午餐を過ごすことが出来たのである。

ブレアが勇ましく、献身的な微笑を見せた。エドはキャンディーを貰えて嬉しそうな少年の様に見えた。そしてエイミーは何故ベラの訪問に対して憤りを感じていたのかを疑問に思い始めた。何故なら彼女はベラが傍にいることに満足しており、一緒に居て居心地の良さを感じたからである。エイミーは土曜日の午前、エドのお姉さんと一緒に最高の買い物をしに行くことと決心した。唯一大事なことはベラが存在を愛することだったのかもしれない。

チャンセリーレーン

拝啓 ルイス様

私はあなたがこの手紙を読んだ後不思議に思い、二度とパーティで出会う女性と話すのは止めようとお考えにならない様に願います。私達は先週、バリーで少しの間だけ会って会話をしました。あなたが法廷弁護士として働いているお話や、神様は私が忙しい日々を過ごし、毎日ジンを飲んで酔っ払っている理由を知っているとか話しましたね。あの夜、青いドレスを着ていたのは私だけで、羽毛の襟巻をまるで生え変わった毛のように身に纏っていました。兎にも角にも、あなたの唯一の

失敗は職業を私に明かしたことでしたが、あの夜に私がした失敗は数多かったと感じます。

私は法律に精通した人物を全く知らないの、あなたに助けて欲しいと考えています。職業別電話帳を使って自分に合う弁護士を見つけるのが一般的な方法であると思うのですが、私はいつも弁護士事務所を自分の足で見て回っています。しかしながら私の条件に見合う所は見当たりそうにありません。大抵の事務所は書類の山で溢れていて、女性がパソコンに向かって何かを一生懸命に打ち込んでいます。私はあの夜あなたが弁護士としてとても頼りになるのではないかと思ったので、あなたに相談させて頂きたい事があります。

ある人物を契約違反として訴訟を起こし、その人物が所有する物、全てを奪ってしまいたいと考えています。この行動が一種の事件となり世間の注目を浴びて、私が法廷を去る瞬間の写真が新聞で取り上げられる様になればよいのです。本気で実現したいことは私自身の声明が掲載され、世に発行された新聞で読むこと、そして多くの警察官に協力を願うことです。

ですが、私はどの様に行動を起こしたらよいのが分かりません。私とその人物に何かを直接持って行くのか、それとも令状や訴訟の通知を送ればよいのでしょうか？全ては行動が開始された後の勢いが重要であると思うのですが、不安な状態です。そんな中で、もし宜しければ早急にご協力をお願い出来れば幸いです。

この様な事で謝礼等を用意するのは、私の為に敏腕弁護士であるルイスさんの知恵と経験の力をお借りするにあたっていささか不適當かと思われませんが、全ては私の利益となる内容であるが故に謹んで渡させて頂きたいと思います。覚えておられるかどうかは不明ですが、私はタップダンサーとして働いています。(あの夜にいくつかの踊りを披露しました)ですので、ご興味がありましたらレッスンに是非お越しください。

敬具

ジリー・トゥイリー

拝啓 トム様

遅ればせながらですが先週の素晴らしいパーティではお世話になりました。あの日沢山のお酒

を飲ませて頂いた結果二日酔いで数日間倒れていましたが、トムさんのお友達全ての方々とお話をすることが出来て大変楽しい時間となりました。一人ジリー・トゥイリーという難しい名前の女性が参加していたと思うのですが、お分かりになりますでしょうか。青いドレスを着て、羽毛の襟巻をしていた方です。間違えて彼女のライターを持ち帰ってしまったのでお返ししたいと思っています。もし連絡先をご存知でしたらお教え頂けないでしょうか。ジリーさんは素敵な雰囲気的女性だったと思うのですが、長くお付き合いをされていますか？

改めて、本当に有難う御座いました。

敬具

ジョン・ルイス

拝啓 ジョン様

お手紙有難う御座います。先日のパーティをお楽しみ頂いたのなら、私も幸いに存じます。ジリー・トゥイリーさんの件ですが、名前をお伺いし、聞こえた通りに書かせて頂いていたと思います。私自身は彼女と全く面識が無く、恐らくフレディさんの友人である銀行員の男性と一緒に来ている女性だと思います、彼なら知っているかと思われれます。パーティで素敵なダンスを披露して頂いた女性の方でお間違いありませんか？パフォーマンス中は少しこわばった様子だったと思いますが、素晴らしい演技でした。

敬具

トム

拝啓 トゥイリー様

お手紙有難う御座います。誠に申し上げにくいのですが、私に連絡されたのは賢明なご判断ではないと思われれます。理由と致しましては、法廷弁護人である私の仕事は事務弁護士から依頼されてからのお話となります。従って、もし法的な問題をお抱えになられているのでしたらお近くの弁護士事務所にお尋ね頂きたいと思います。もしお抱えしたい弁護士の方が今回の案件を解決できないようでしたら、恐らく違う弁護士、あるいは弁護士事務所を紹介してくれると推測致します。

昨日のパーティでは愉快的な時間を有難う御座い

トッテナム・ヘイル（翻訳）

ました。トゥイリーさんのことは快く、印象深い方として大変よく記憶しております。正直な所を申し上げさせて頂くと、この様な訴訟は大変厳しい問題であり、満足のいく結果になるのは少々困難であると思います。納得がいかず悔しい思いをされた方々は他にもたくさんいらっしゃると思われ、世に広く知られる様な事案になる可能性は極めて低いものであるとお伝えします。

私の意見になりますが、くれぐれも慎重に行動をお取りになりご自身の人生を大切にしてください。これは法的な助言ではありませんのでご理解いただきます様、宜しくお願い致します。

ここから先トゥイリー様にとって満足のいく結果と日々が導かれます様、適切なお判断を心からお祈り申し上げます。

敬具

ジョン・ルイス

拝啓 ルイス様

お手紙有難う御座います。私はあなたがこの様に堅苦しい言葉遣いで、今回のことに対してご協力頂けると信じておりました。丁寧に文面を作り上げなければならないお仕事をされているので私にとって重々理解のいく範囲内であります。では今回の問題に関してですが、チャーリーという裕福で傲慢な銀行員、私の人生のありとあらゆる場面において悪者である男が、幾度となく私にプロポーズをしてきました。私は少し嫌な予感がしていたのですが、結局彼との結婚を承諾し婚約指輪を頂きました。そして来月六月には結婚をする予定でした。

何故私がこの様なことをお伝えしているかと申し上げますと、自分では解決できない問題について私の弁護士であるあなたが守秘義務を守ってくれると思うからです。私はもう若くありません。最近ではあまりショーには出演せず、常に教える側として立っています。結婚をすることは経済的にも非常に平和的な手段であると考えたので、チャーリーと婚約をしました。私は彼の友達の前ではいつも行儀作法に細心の注意を払い、彼自身も私の友達の前では常識のある人物として振る舞って来ていました。全ては順調の様に思っていたのですが、彼の銀行員としての仕事から少し気味の悪

い問題が起きたのです。取引先の多くの銀行家達が不純な人間ばかりであったのでチャーリーは私の友人と共に彼の人生を安定させる為に努力していました。私は決して彼を失望させるつもりはなく、チャーリー自身も私の仕事には出来るだけ干渉しないように考慮してくれていたのも、私も彼の仕事の理解に努めました。

トムのパーティがある日まで、私とチャーリーの関係は上手くいっていました。しかしパーティの翌日私が朝起きた後、いつも居るはずである彼が居ませんでした。彼は私の婚約指輪を持ち置手紙を残して去ってしまいました。裏切者…。彼は手紙で、僕はこの置手紙のコピーを取っておく。僕達は証拠として一枚ずつ保管する方がいい、と言っていました。私は彼の手紙の内容と住所をこの手紙に添付してどの様な状況であるかを分かりやすく説明させて頂こうと思います。

申し訳ありませんが、たった今私は資金に余裕がありませんが、訴訟の手続きが開始されれば必ず費用はお支払いさせて頂くと約束します。

敬具

ジリー・トゥイリー

手紙のコピー

ジリー、

私はもう君にうんざりしている。今夜の君の姿は私の記憶から消し去りたい限りだ。二度と会いたいと思わない。私はずっと婚約の誓いを守るために努力を重ねてきたが、君はそうではなかった。

お互い結婚をする前に色々気づけて良かったと思う。正直に言うと、僕は何一つ君との良い思い出が蘇らないくらい無性に怒りが込み上げている。

婚約指輪は返してもらおうけれど、僕の腕時計については何も言わない。

チャールズ

拝啓 トゥイリー様

申し訳ございませんが、誤解が発生している様子です。私は今回のベンソン様への訴訟について力になることは出来ません。ですが、トゥイリーさんの知人の一人として申し上げさせて頂くならば、この様な案件に対処するにあたってトゥイリー

さんにとって納得のいく結果になります様、慎重にそして賢明なご判断をして頂くことが必要であるのではないかと思います。既に伝えさせて頂いたと思うのですが、トゥイリー様の事はとても快く素敵なお方であるとパーティでお会いした時から思っており、同時にベンソン様との間に何か確執があるとも思っており、たとえ彼があなたの傍にいたとしても一人の社会人として生活することが出来る方であると信じております。私の助言と致しましては、今回思案されている事柄をお忘れになり自身の生活を最優先して、ストレスを可能な限り避ける最良な選択をして充実した日々をお過ごし願いたいと思います。これは法律家ではなくパーティで知り合った一人の知人からの意見として捉えて頂きたい次第であります。告訴を諦めれば、トゥイリー様が御納得いかれるまで少々時間が掛かり、厳しい状態になると考えられますが、何卒適切なお判断をして頂きます様、心からお祈り申し上げます。

敬具
ジョン・ルイス

拝啓 ジョン様

私の人生であるので、私には何をすべきかを定める権利があります。従って権利を脅かす様な発言は慎んで頂けますでしょうか。訴訟したいと思えば訴訟します。手続きの準備を開始して頂いても宜しいでしょうか。もしして頂けないのであれば、あなたを契約違反で告訴しなければなりません。既にあなたは多くの時間を無駄にしています。今回は裁判で提出する資料になるであろう、チャーリーが私と結婚を約束することを述べていた手紙を同封しておきます。

迅速なご対応をお願い致します。

敬具
ジリー

愛するジリーへ

銀行というものは君が提案する様な、取るに足らない新規事業の為に融資をすることは出来ない。僕は同業者達に君のダンスグループを理解させる為に、芸能界に入りたいと計画している人を応援する為に、アメリカに来た訳ではない。支援を受

けられないことは君にとって悲しい現実だけれども、僕達は半年以内に結婚をするのだからタップダンサーの先生としての仕事に、そして僕の愛する君の頭脳と踊りに何も心配をする必要はない。愛してるよ、ジリー。けれども、会社側の負担になるから僕の職場に何度も電話を掛けてくるのは止めて欲しい。僕は大概会社には会議がある時にしか顔を出さないから一日の間に君から受話器で話す必要の無いようなことについての電話が鳴り止まないのは皆に迷惑が掛かる。

お願いだ、心配しないで、

チャールズ

拝啓 トゥイリー様

彼からの手紙の内容はこれ以上の関係を断ち切るといった内容が明確に述べられているので、法的な手段の適用は難しいと思われます。従って、慎重に行動し、賢明な判断をご検討下さい。そして信頼出来る弁護士を見つけてご相談なさってみて下さい。

敬具
ジョン・ルイス

拝啓 ジョン

私が一体何をしたのでしょうか？何故このようなことが私に降り注いで来るのでしょうか？あの夜、トム・バリーのパーティで私達はとても幸せでした。そう言えば今回の事はチャーリーの責任であると裏づける話をまだお伝えしていなかったですよ？実を言うと、トムとチャーリーは直接の友人関係ではありませんでした。トムは彼の友人であるフレディと仲が良かったのです。つまり、彼とトムの間柄に何らかの悪影響を及ぼし、彼を失望させた責任は私にはありません。

今回、私が何故彼に対して婚約破棄の大罪で訴訟を起こし世間の注目を集めたいのかというと、チャンスが欲しいからです。この事が公表されれば皆は同情し耳を傾け、私自身も仕事を獲得する機会に恵まれると思います。理解して頂けますよね？チャーリーも婚約指輪も無く金銭的にも余裕が無いこの私を。私はただ、この手で新たな人生を歩む為に、必死に闘っているのです。

あなたにとって私の問題は些細な事であるかも

トッテナム・ヘイル（翻訳）

しれません。あなたは裕福で、弁護士という職業を持っているのですから。ですが、もしあなたが皆に裏切られ、瞬間に消えていく惨めなダンサーだとしたら、どうしますか？私はもうすぐ26歳になり、私のダンサーとしての絶頂期は終わりが近づいています。

私は今回の事が人生の中で、最後のチャンスであると、人生を取り戻す最後の機会であると思いました。ですが、ご迷惑をお掛けしていたのなら誠に申し訳ありませんでした。私は今とてつもなく混乱している様です。さようなら。

ジリー

拝啓 ジリー

私の返答は少し厳し過ぎたものであったかもしれませんが。人生を取り戻すことの大切さを真摯に受け止めたいと思います。そしてあなたのその勇気を応援します。信じて下さい。あなたに今必要なことは法的に問題を解決するのではなく、信頼できるご友人の方々から助言を受け、同時に励ましを受けることであると示唆いたします。これから先の人生でチャーリーさんの様な人物と関わるのは避け、あなたの価値観を尊重して下さい。記憶が曖昧ですが、パーティでチャーリーさんをチラッとお見かけしたと思います。その時に受けた印象は少し不自然でした。

私の意見ですが、チャーリーさんはかなり年上の方に見えたのでもう少し若い方とお話をされてもいいかなと思います。もし宜しければ今度何処かで食事でもしませんか？今回の事について弁護士と顧客の関係ではなく、一人の友人としてお話をお伺いします。ご意見お聞かせ下さい。

敬具
ジョン

愛すべきモニカへ

重要な仕事が舞い込んできて週末の予定が確保出来そうになく、ロンドンを離れられそうにない。君が悲しむ姿を想像したくはないけれど、約束した通り一生懸命仕事をして人生を安定させる為だから理解して欲しい。ごめんなさい、良い週末を過ごして下さい。また直に会える日を楽しみにしています。

愛してる
ジョン

愛するジョンへ

ごめんなさい、ジョン。私の父と母があなたをロンドンへ向かわせてしまったばかりに。あなたの知っている通り、父は相変わらず働け、遊ぶなど言い続けています。

先週の火曜日に実はロンドンへ行きました。アパートを訪ねたけどあなたが居なかったので夜遅くまで待って電話も何回か掛けました。結局、私の父が言っている事が正しいのかもしれませんが。私と家族はあなたの成功を心から応援しています。けれども一切遊ばずに働くべきという考え方には抵抗を覚えます。

私も愛してる、

モニカ

親愛なるジョンへ

本当に、本当に有難う御座います。週末がとても楽しみです。私は一度バリを訪れてみたいとずっと考えていました。私を理解してくれる人とお話が出来るのは安らぎの瞬間となるでしょう。これまで色々ご迷惑をお掛けして申し訳なかったと思いますが、正直言えば、幸せでした。

では週末に、

愛してます ジリーより

拝啓 モニカ様

君が今日職場に電話をしてきた時、僕は顧客の相談を受けていて仕事でした。何度も君からの電話が鳴るので、顧客の前で私の私的な話をしなければならず恥をかきました。異常であり無神経な行動でしたね。君は僕達が結婚をするであろうといった馬鹿げた考えを持っているのですね？全く理解できません。僕にそんなつもりはないし、君とはずっと良き友達として接してきました。そして君が今日した事と同じ事をしない限り、この関係を続けようと思います。

君に今まで送っていた手紙を確認して「結婚の約束」を僕がしていたかどうかを確認して欲しい。見つけれないと思うから。この辺でこんなくだらない話は終わりにしておきます。

ジョン

拝啓 トム様

私はトムさんの何気ない御忠告に心から感謝致します。ですが私はトゥイリー様と結婚をすることになりました。先日お聞かせ頂いたお話の中で、彼女が七つの婚約違反を犯され、それらの全てが裁判沙汰にはならず示談で解決したといった御冗談は非常に不愉快であり、滑稽であります。実際に私は彼女に法的な知識が無いと理解しており、おっしゃられていた様な事柄を彼女自身の力だけで処理出来るはずがないと確信しています。従いまして、トムさんやご友人の方々の間で共有されているのであろう彼女に対する情報は適切なものではないと申し上げさせていただきます。

話変わりまして、トムさんには心から感謝致しております。先日のパーティを催して頂いたおかげで私は自分の妻となる人物と出会うことが出来ました。そこで我々の結婚式に是非お越し頂きたいのですが、ご意見お聞かせ下さい。これからも宜しくお願い致します。

敬具

ジョン・ルイス

ブリクストン

人事部で働く50代になりかけの女は灰色で汚く、泡立っているようなパーマヘアをしていてそれはまるで年老いていくハーポ・マルクスに似ていた。サンディーはそんな彼女に対して蔑む様な視線を送った。

「えーっと、勿論、リングさん、あなたを泊めさせてあげることは出来るのですが、正直な所ご自身でどこか宿泊可能な場所をお探しになられた方が宜しいかと思います」

「どの様な方法で私が出来るとおっしゃられているのでしょうか？」サンディーが尋ねた。そこは彼女が働いていた病院とは全く違って、看護師達は何処で生活をしなければならぬかといった決まりが厳しく決められており、唯一滞在が認められているアパートや宿舎のリストがあった。